東原遺跡

遺跡番号　211-089
調査次数　第１次
所在地　山形県東根市大字羽入字東原地内
北緯・東経　38 度 24 分 07 秒・140 度 21 分 38 秒
調査委託者　山形県村山総合支庁建設部北村山道路計画課
起因事業　道路改築事業 主要地方道山形天童線 成生工区
調査面積　2,810㎡
受託期間　令和７年４月１日～令和８年３月 31 日
現地調査　令和７年５月 12 日～ 10 月 31 日
調査担当者　草野潤平（現場責任者）・三浦一樹・結城駿・小幡桃花
調査協力　東根市教育委員会・東根市土地改良区
遺跡種別　集落跡
時代　平安時代
遺構　竪穴建物、土坑、柱穴、ピット、溝、炭・焼土を含む落ち込み
遺物　土師器、須恵器、土製品、石器、金属製品（文化財認定箱数：120 箱）



遺跡位置図（S ＝ 1:25,000）

調査の概要

東原遺跡は、令和６年６月に東根市教育委員会からの発見通知によって新規登録され、同月に行われた山形県観光文化スポーツ部による試掘調査結果を踏まえて遺跡の範囲が拡大修正された古代の集落跡である。山形空港にほど近い東根市南西端に位置する本遺跡は、1km ほど南を東西方向に流れる乱川右岸の扇状地面にあり、調査範囲を中心とする一帯がさくらんぼ等の果樹園や畑に利用されている（遺跡位置図・写真１参照）。

今回の調査は、乱川の南（天童市成生）まで完成している山形天童線を東根市羽入へ延伸する道路改築事業に伴うもので、大富中学校南西の道路交差点より南側の広い調査区を１区、北側の狭い調査区を２区と設定した（図２）。１区の場所はおおむね平坦だが広域的に見れば北東側と南東側がごく緩やかに高くなる地形で、乱川の河道跡を示す扇状地面上の浅い帯状凹地にあたる（図１）。

試掘調査の結果、現在の畑土である暗色の表土と明褐色の砂質シルト層（Ⅰ層）の下に奈良・平安時代の土器片を多く含む暗褐色土層（Ⅱ層）と黒褐色土層（Ⅲ層）が堆積し（写真 2）、遺跡範囲より南側ではこの遺物包含層が認められずⅠ層の下に河川堆積と考えられる砂礫層が確認された。遺跡の立地を踏まえると、Ⅲ層は草の生えた帯状凹地の古代の生活地面で形成された黒土層、Ⅱ層は周辺や凹地上流から雨水が流れ込んで形成された堆積層と把握できる。Ⅰ層の均質な明褐色砂質シルト層は乱川の氾濫洪水でいっきに流れてきた泥土または果樹園の造成盛土とも考えられる。

発掘調査では遺物包含層（Ⅱ・Ⅲ層）の上面まで重機掘削を行なった後、遺物の出土を確認しながら人力で掘り下げを進めた。遺物の出土量は当初の想定を大きく上回り、内寸 39 × 55 × 14cm の遺物収納コンテナ 120

箱分に及ぶ膨大な量の古代土器片が出土している。

遺構と遺物

多くの遺構は扇状地堆積層である地山層（Ⅴ層）より上の地山漸移層（Ⅳ層）上面で検出しているが、遺物包含層（Ⅱ・Ⅲ層）を掘り下げる過程で確認した遺構も存在する。

１区では、可能性があるものを含め 20 棟以上の竪穴建物や多数の土坑、柱穴、ピット、溝を検出したほか、炭・焼土を多く含む歪なかたちの落ち込みが至るところで見つかった。調査区全体に広がる遺物包含層はⅢ層よりもⅡ層の出土量が多く、土器を一括廃棄したような集中地点も見られる。

炭・焼土を含む落ち込みからは接合関係をもつ大きな破片の土師器が比較的まとまって出土する傾向があり、ひとつの落ち込みのなかに焼土の面的な広がりが複数箇所で確認された（写真 3）。落ち込みの中で複数回火を焚いた痕跡と考えられ、焚火行為と土器の廃棄（または意図的な埋置）を繰り返した状況が想定される。落ち込みの形状は不規則にゆがんだものが多いが、なかには埋まりかけた竪穴建物の上部で確認されたものや落ち込みの一部を人為的に掘り込んだ状況を示すものもあり、竪穴建物廃絶後の窪みなどを含む当時の生活面に存在した落ち込みを利用し、必要な場合に一部を掘り込んで拡張しているようである。土師器焼成遺構や何らかの祈願を行なう祭祀の場であった可能性などが考えられるが、今後の整理作業で出土土器の種類や破片の状態なども確認したうえで遺構の性格を検討する予定である。

１区の遺構精査は大部分が途中段階で、今年度掘り下げを行なったものは北端の竪穴建物・土坑・ピット（写真 4）など一部に限られる。北端の竪穴建物は上部が大きく削られ最下層の掘形埋土をわずかに残す程度の遺存状態だったが、その 40m ほど南で検出した竪穴建物は上部まで良好に残存し床面近くの覆土から大量の鉄滓や鞴の羽口片（写真 5）が出土した。鍛冶工房の可能性が高く、遺物包含層出土の鉄鏃（写真 6）なども東原遺跡で製作したものかもしれない。また中央部東壁沿いで検出した竪穴建物からは完形に近い 9 世紀後半の須恵器坏（写真 7）などが出土し、集落が営まれた時期の一端を示している。これらに加え特徴的な遺物として、古代では比較的珍しいミニチュア土器（高さ２～ 4cm 前後の埦形・鉢形）が複数出土しているほか、土製紡錘車や漁網用の管状土錘、土製円盤などが見つかっている。

２区では、調査区南端で竪穴建物の一部（写真 8）とピット３基が確認された。遺構の少なさに加え、遺物包含層も１区と比べて出土量が圧倒的に少なく北側へいくと認められなくなる状況で、遺跡の北限であることを反映していると理解できる。２区は検出遺構を完掘して調査区の埋め戻しまで完了した。

まとめ

東原遺跡の令和７年度発掘調査は、１区の遺物包含層掘り下げを中心に進め、大部分の遺構精査については令和８年度に実施予定である。したがって現時点では遺跡の詳細がまだ判然としていないが、今回の発掘調査成果として出土遺物のなかに８世紀後半を中心とする奈良時代の土器を含みつつ、遺跡の帰属時期は９世紀が主体を占めるものと把握された。当該期は東山道駅路が遺跡近くを通るようにルート変更された時期にあたり、豊富な遺物出土量から活発な生産・流通活動の展開をうかがわせる東原遺跡が、当地における古代社会の実相を明らかにするうえで重要な鍵を握っている。

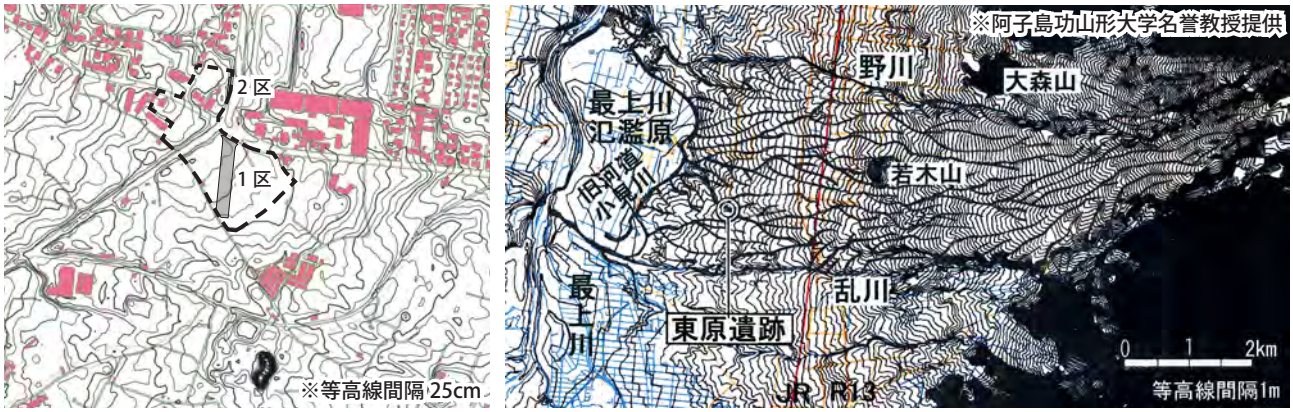


図１　遺跡周辺の地形と野川・乱川間の扇状地面上の河道跡凹地の分布（左：１万 2000 分の１／右：12 万分の 1）



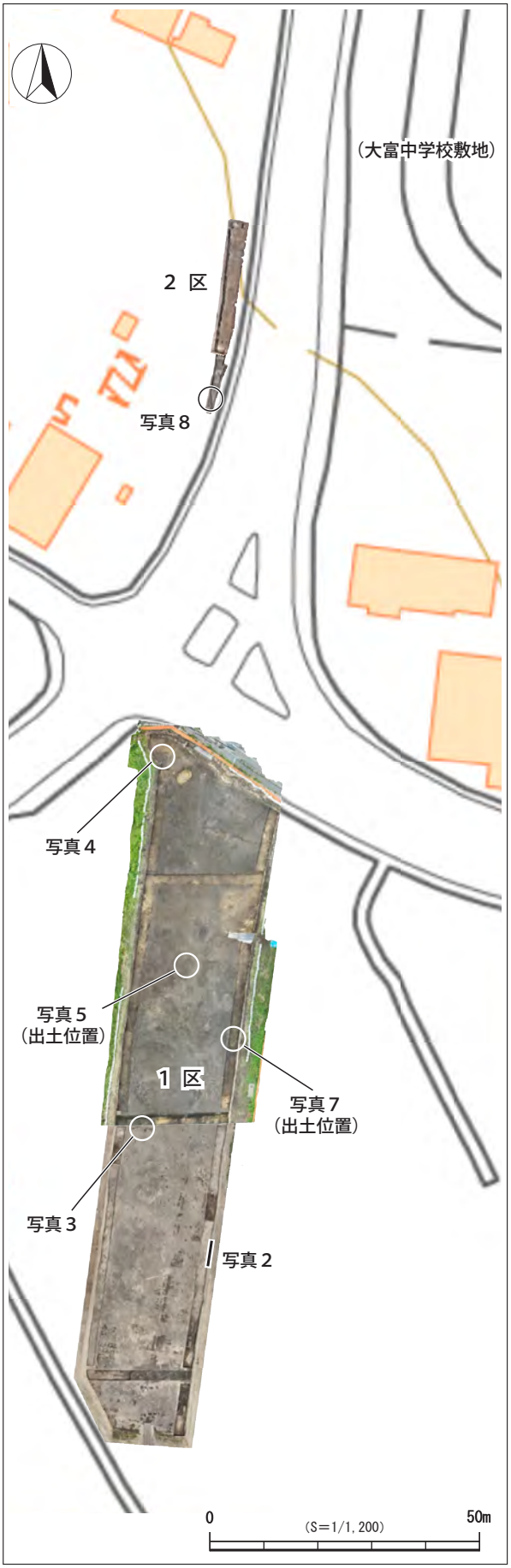


図２　１区・２区のオルソ画像（左）と調査区全体図（右）



写真１　東原遺跡調査区周囲の景観（南西から）

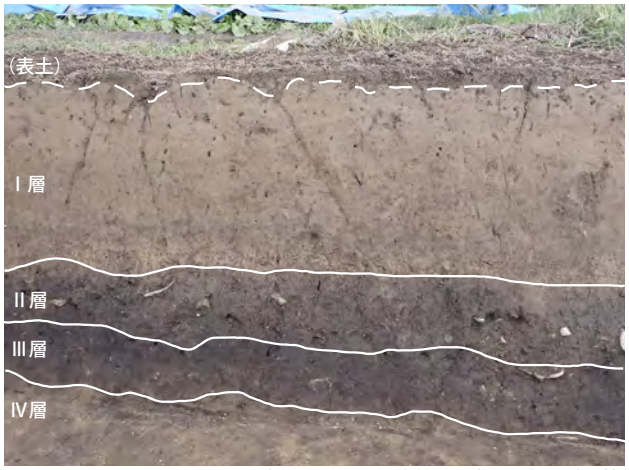


写真２　土層堆積状況（1 区南側東壁）



写真３　炭・焼土を含む落ち込み（1 区中央部西側）



写真４　1 区北端の竪穴建物・土坑・ピット（東から）



写真５　1 区北側の竪穴建物から出土した鍛冶関連遺物



写真６　1 区北側の遺物包含層（Ⅱ層）から出土した鉄鏃



写真７　1 区中央部東側の竪穴建物から出土した須恵器坏



写真８　2 区南端の竪穴建物完掘状況（北西から）